

# 出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

## 第10集

高浜Ⅱ遺跡

田中谷貝塚

矢野遺跡

2000年3月

出雲市教育委員会

# 出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

## 第10集

高浜Ⅱ遺跡  
田中谷貝塚  
矢野遺跡

2000年3月

出雲市教育委員会

## 序

出雲市は、県下でも埋蔵文化財の密集する地域として知られています。特に、近年の斐川町荒神谷遺跡や加茂町加茂岩倉遺跡における大量の青銅器発見は、出雲市西谷墳墓群とも関連して日本古代史に一大センセーションを巻き起こすとともに、日本の古代史を解明するうえで「古代出雲」の重要性を再認識させることになりました。

これらの文化財は、貴重な文化遺産として活用を図るとともに、将来にわたって保存、活用していくなければなりません。しかし、近年は大規模な開発が進み、発掘調査は増加する一方で貴重な文化財が少しづつ破壊されているのが現状あります。

出雲市では、平成元年から出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行し、今までに紹介できなかった埋蔵文化財のいくつかを記録として残してまいりました。今年度は平成2年度に発掘調査をしました矢野遺跡(矢野町)、平成6年度の田中谷貝塚(西神西町)、平成11年度の高浜Ⅱ遺跡(平野町)を報告書としてまとめ、ここに第10集として発刊の運びとなりましたが、今後もさらに埋蔵文化財保護行政を推進する一環として刊行してまいりたいと考えています。

最後に、本書を発刊するにあたり、調査にご指導、ご協力を賜りました皆様に、心から御礼申しあげます。

平成12年3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博

# 例　　言

1. 本書は、これまで実施した発掘調査のうち、未報告のもの一部についてまとめたものであり、下記の3遺跡について取り扱っている。

高浜Ⅱ遺跡……………旧高浜小学校跡地における北部福祉拠点整備事業に伴う発掘調査

田中谷貝塚……………西神西地区圃場整備事業に伴う発掘調査

矢野遺跡……………原治男氏宅庭地整備に伴う発掘調査

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

高浜Ⅱ遺跡……………平成12年（2000）2月24日～3月1日

田中谷貝塚……………平成6年（1995）3月1日～3月8日

矢野遺跡……………平成2年（1990）11月26日～平成3年（1991）3月27日

3. 発掘調査の地番は、次のとおりである。

高浜Ⅱ遺跡……………出雲市平野町1183番地

田中谷貝塚……………出雲市西神西町598-3番地

矢野遺跡……………出雲市矢野町270番地

4. 発掘調査体制は、次のとおりである。

高浜Ⅱ遺跡

調査主体 出雲市教育委員会

事務局 大田 茂（文化振興課長）

川上 稔（同 課長補佐）

調査指導者 植 真治（島根県教育委員会文化財課文化財保護主事）

調査担当者 岸 道三（文化振興課副主任主事）

糸賀 伸文（同 臨時職員）

田中谷貝塚

調査主体 出雲市教育委員会

事務局 野津 建一（文化・スポーツ課長）

新宮 雅子（同 課長補佐）

調査指導者 広江 耕史（島根県教育委員会文化課主事）

調査担当者 川上 稔（文化・スポーツ課係長）

岸 道三（同 主事）

三原 一将（同 主事）

## 矢野遺跡

調査主体 出雲市教育委員会

事務局 山本 順一（社会教育課長）

調査指導者 丹羽野 裕（島根県教育委員会文化課主事）

調査担当者 松山 智弘（出雲市特別事業部臨時職員）

米田美江子（同）

5. 調査にあたっては、地元の方々から多大なる協力を賜った。また、矢野遺跡の発掘調査にあたっては、地権者である原 治男氏に多大なる協力を賜った。記して謝意を表します。

6. 本書の編集、執筆は、岸が行った。なお、矢野遺跡の調査については、残存する図面と遺物をもとに、米田美江子（文化振興課主任嘱託員）の協力を得て、岸がまとめたものである。

7. 本書掲載の遺物実測図及び写真撮影については、岸、糸賀が行った。

8. 遺構の略称記号は、次のとおりである。

P（ピット状遺構） SD（溝状遺構） SX（性格不明遺構）

9. 本書に使用した方位は磁北を示す。

10. 高浜Ⅱ遺跡の発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。

宝正千賀子 吉川 善美 原 昇 井上 茂 三嶋 文子

11. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事して頂いた。

遠藤 恭子 荒木恵理子 吹野 初子 石川 桂子 永田 節子  
河井 栄子 関野 和栄

# 目 次

序

例言

目次

挿図目次

## 高浜Ⅱ遺跡

1. 位置と環境 .....	1
2. 調査に至る経緯 .....	2
3. 調査の概要 .....	3
4. まとめ .....	7
出土遺物観察表 .....	8
図 版 .....	図版 1 ~ 図版 4

## 田中谷貝塚

1. 位置と環境 .....	9
2. 調査に至る経緯 .....	10
3. 調査の概要 .....	10
4. まとめ .....	13
出土遺物観察表 .....	14
図 版 .....	図版 1 ~ 図版 3

## 矢野遺跡

1. 位置と環境 .....	15
2. 調査に至る経緯 .....	16
3. 調査の概要 .....	16
4. まとめ .....	25
出土遺物観察表 .....	26
図 版 .....	図版 1 ~ 図版 4

## 挿図目次

### 高浜Ⅱ遺跡

第1図	調査地周辺の遺跡	1
第2図	発掘調査区位置図	2
第3図	P1・P2実測図	3
第4図	P3実測図	4
第5図	S D 01 実測図	4
第6図	遺構配置図	5・6
第7図	出土遺物実測図	7

### 田中谷遺跡

第1図	調査地周辺の遺跡	9
第2図	発掘調査区位置図	10
第3図	貝塚セクション図	11
第4図	出土遺物実測図	12

### 矢野遺跡

第1図	調査地周辺の遺跡	15
第2図	調査地概略図	16
第3図	第1トレーナー遺構配置図	17
第4図	第2トレーナー遺構配置図	18
第5図	出土遺物実測図 (1)	20
第6図	出土遺物実測図 (2)	22
第7図	出土遺物実測図 (3)	24
第8図	出土遺物実測図 (4)	25

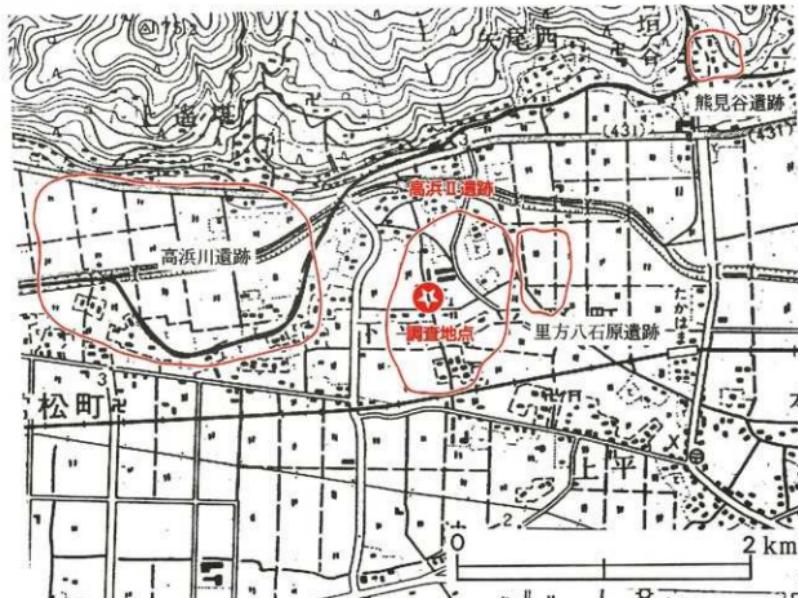
# 高浜Ⅱ遺跡

## 1. 位置と環境

出雲市平野町に所在する高浜Ⅱ遺跡は、出雲市街地から約4km北西に位置する。出雲平野の北端、北山山麓の南側を東から西に向かって流れる高浜川（山持川より続く河川）の南方に広がる遺跡で、奈良時代頃には西流し、「神門水海」へと注いでいた斐伊川によって形成された旧自然堤防上に立地している。

この地域周辺には、弥生時代から中世にかけての遺跡が密集しており、高浜Ⅱ遺跡の西方には古墳時代の遺物散布地として知られる高浜川遺跡、東方には平成4年（1992）に発掘調査が行われ、須恵器や土師器が出土した里方八石原遺跡や弥生土器や土師器の散布地として知られる高浜Ⅰ遺跡、さらに北方には熊見谷遺跡などが存在している。

高浜Ⅱ遺跡では、平成9年（1997）に高浜地区ふるさと農道整備事業に伴う発掘調査が行われている。<sup>(2)</sup> この地域は今回の調査地から約150m南西にあたる地域で、この際に須恵器や土師器が多量に出土し、7世紀末から8世紀前半頃を中心として生活が営まれていたことや、遺跡の範囲がさらに西方へ広がりをもつことが明らかとなっている。



第1図 調査地周辺の遺跡

## 2. 調査に至る経緯

平成11年（1999）6月、出雲市教育委員会生涯学習課より旧高浜小学校跡地における北部福祉拠点整備事業予定地内の埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地は、周知の遺跡である高浜II遺跡の範囲内にあることが予想されたため、試掘調査を実施して遺跡の有無を確認することとした。

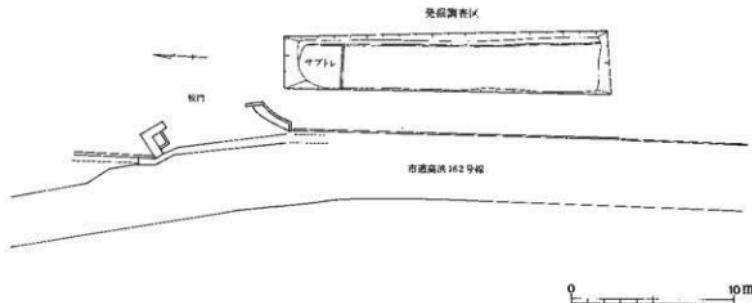
試掘調査は、同年7月に16ヶ所のトレンチを設定して実施した。その結果、事業予定地の東側では遺構や遺物は検出されなかったが、西側に設定した3ヶ所のトレンチからは中世のものと考えられる土師器小片が出土したため、この区域については発掘調査が必要であると判断した。

その後、事業を担当する生涯学習課と協議し、平成12年（2000）3月までに発掘調査を実施することで合意した。なお、遺跡区域内には当初から公民館の建設が計画されていたが、建物を東側（遺跡範囲外）に建設することとしたため、今回の調査は事業予定地の西側を南北に通る市道高浜162号線の拡幅部を対象に行うこととした。

発掘調査に至る手続きについては、まず、事業を担当する生涯学習課から平成12年（2000）2月18日付で埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第57条の3）が提出された。これを受け、埋蔵文化財発掘調査の報告（同法98条の2）を同年2月24日付で文化庁長官へ提出している。

発掘調査は、まず、試掘調査の際に確認されていた70cm～80cm程度の盛土を重機によって取り除き、排土した後、平成12年（2000）2月24日から開始した。そして、南北5m、東西2m間隔のグリッドを設定し、遺構プランの検出に留意しながら調査を進め、同年3月1日に調査を終了した。

なお、調査終了後に埋蔵文化財発見届（遺失物法第13条）、埋蔵文化財保管証をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。



第2図 発掘調査区位置図

### 3. 調査の概要

#### 堆積土状況（第6図）

基本的な層序は、上層から約80cmは造成土で、その下面にはオリーブ黒色粘質土（一部オリーブ褐色土）、褐色土と続き、地山である固くしまりのある灰褐色粘質土（一部暗褐色粘質土）に達する。

このうち、オリーブ黒色粘質土と褐色土が遺物包含層になっており、古代から近世にかけての遺物が混在している。遺物包含層の層厚は、約30cm～40cmである。なお、調査区の南側においては一部異なった堆積を示しているが、これは旧高浜幼稚園舎の建物基礎により擾乱を受けた部分である。

#### 遺構（第6図）

遺構は、地山面である灰褐色粘質土の上面でピット状の遺構を3（P1～P3）、溝状遺構を1（SD01）検出している。いずれも出土遺物から近世末（19世紀頃）の遺構と考えられる。また、遺構としての残存状況は良くなく、地山の上層はかなりの削平を受けているものと考えられる。

#### 遺物（第7図）

遺物には、須恵器・土師器・カワラケ・煙管・磁器・動物遺存体などが出土している。

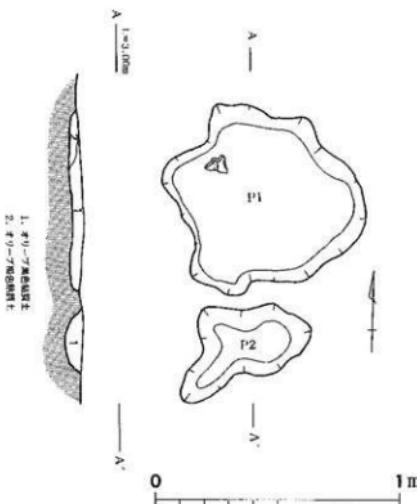
このうち、時期的にもっと古いものは須恵器であるが、2片のみの出土である。土師器は最も多く出土しているが小片が多く、時期幅も中世から近世のものまでが包含層内で混在している。また、磁器には蓮弁文を有するものがあり、動物遺存体が1点出土していることとともに注意される。

以下、検出した遺構、遺物について記述する。

#### P1・P2（第3図）

調査区のはば中央、2Gr～3Grにかけて灰褐色粘質土上面で検出したピット状遺構である。北側をP1、南側をP2としている。

P1は、南北長約75cm、東西長約75cmを測り、ややいびつな円形状を呈している。覆土には、オリーブ黒色粘質土、オリーブ褐色粘質土が堆積している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ち、底面はほぼ平坦に作り出しており、深さは約5cmである。遺物には近世末頃の瓦質土器が1点出土しており、遺構の性格は不明であるが、当該期の遺構である可能性が強い。



第3図 P1・P2実測図

P 2 は、南北長約26cm、東西長約45cmを測り、東西にやや長いいびつな形状をしている。覆土にはオリーブ黒色粘質土が堆積し、断面の形状は、両肩からなだらかに落ち、底面は丸く作り出している。深さは約13cmであり、遺物は出土していないが、覆土の状況などから、P 1 と同様に近世末頃の遺構と考えられる。なお、P 1・P 2ともに検出高は標高約 2.80m である。

#### P 3 (第4図)

調査区の南、3 Gr~4 Grにかけて灰褐色粘質土上面で検出したピット状遺構である。南側は建物基礎による擾乱を受けており、本来は南南西から北北東へ伸びる溝状を呈していた可能性もある。現状では最大幅約60cm、検出長約90cm、深さは約 5 cm を測る。

覆土には、オリーブ黒色粘質土、オリーブ褐色粘質土が堆積しており、断面の形状は、両肩からなだらかに落ち、底面はほぼ平坦に作り出している。なお、検出高は標高約2.75mである。

遺物は出土しておらず遺構としての性格は不明であるが、覆土の状況から、P 1・P 2 と同様に近世末頃の遺構である可能性が強い。

#### S D 0 1 (第5図)

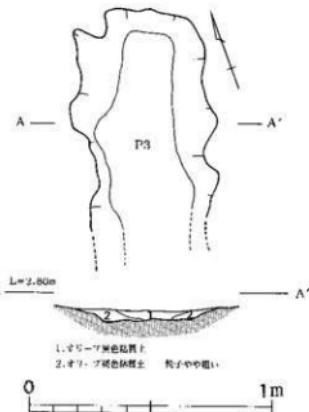
調査区の北側、1 Gr の暗褐色粘質土上面で検出した東西方向に伸びる溝状遺構である。西側は調査区外へと伸びているが、最大幅33cm、検出長75cm、深さ約 7 cm を測る。なお、検出高は標高約2.75mである。

覆土には他の遺構とは異なり、粘性の強い暗褐色粘質土が堆積している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ち、底面は丸く作り出している。

遺物には鉄釘が1点出土しており、他の遺構と同様に近世末頃に築かれたと考えられる。覆土には粘土が堆積していることから、ある程度水の流れがあったことが推定され、水路のような施設であった可能性もある。

#### 出土遺物 (第7図)

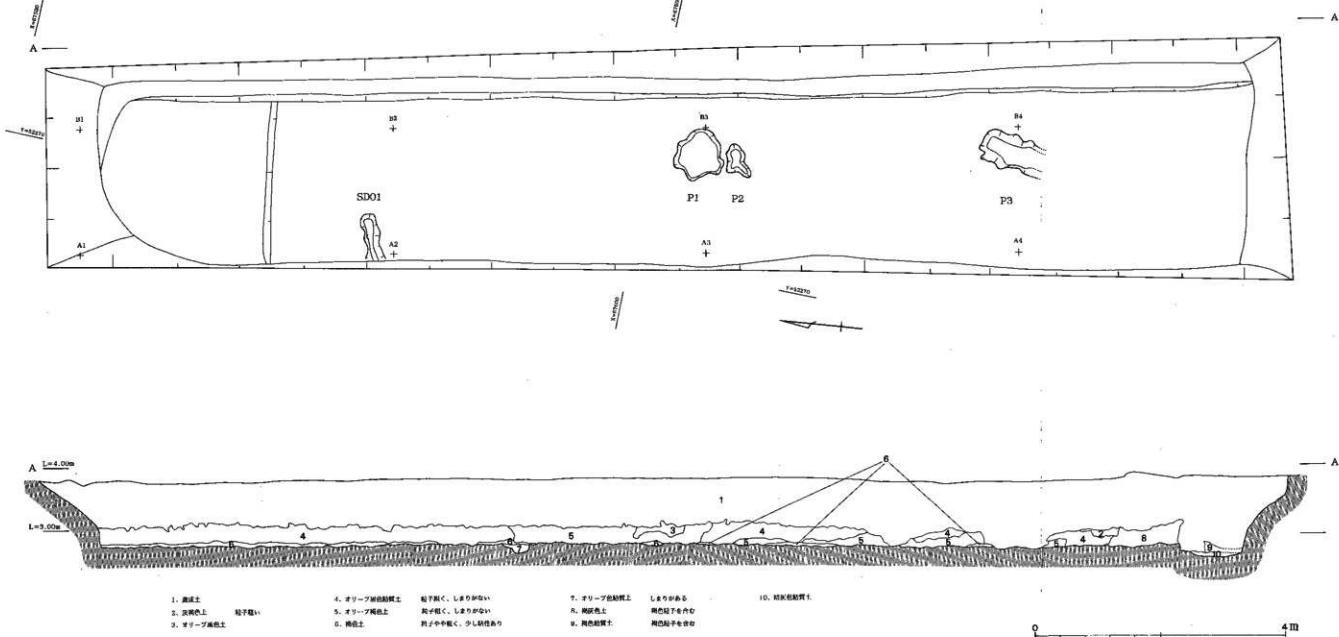
1~4 は、土師器坏である。1・2 は、底部糸切り後、雑なナデによる調整が行われ、いずれも底部と体部との境が明瞭ではないという特徴をもつ。3・4 は、底部が回転糸切りにより切り離されて



第4図 P 3 実測図



第5図 SD 0 1 実測図

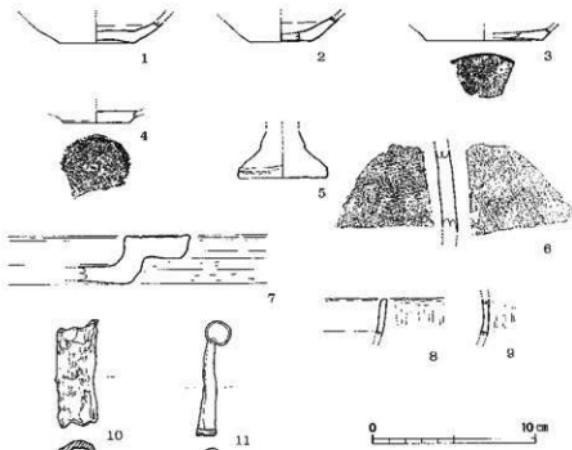


第6図 造構面図

いる。

これらの壺はいずれも小片であり、全体の形状を把握することはできないが、胎土などから、中世期の遺物であると考えられる。

5は、柱状高台を有する土師器壺である。全体的に粗雑な作りで、脚端部には1条の凹線文が認められる。このタイプの<sup>(3)</sup>ものは、出雲市天神遺跡などからも出土しており、12世紀後半以降に出現する器形である。



第7図 出土遺物実測図

6は、須恵器片であるが、外面はカキメ、内面はハケによる調整が行われている。

7は、P1から出土したもので瓦質土器の鍋であろうか。口縁端部には1条の凹線文があり、外面はナデの後、部分的にケズリ、内面はナデによる調整が行われている。近世末頃の遺物であろう。

8は、白磁碗である。外面には鑄蓮弁文がある。14世紀頃のものであろう。9は、青磁碗である。外面には劍型の蓮弁文がある。15世紀後半から16世紀初頭頃にかけてのものであろう。

10は、真鍮製の煙管である。火皿径1.6cmを測る。

11は、地山直上で検出した動物遺存体である。鑑定には出していないが、ニホンジカの大脛骨と類似している。<sup>(4)</sup>

#### 4.まとめ

今回の調査は、調査範囲が狭小であったことから遺物の出土量も少なく、遺構の検残存況もよくなかった。また、検出した遺構は全て近世末頃のものと考えられ、それ以前の遺構は全く確認されなかつた。しかしながら、遺物包含層からの出土遺物には須恵器や中世土師器が含まれることなどから、調査地は、高浜II遺跡の縁辺部にあたる地域と推定される。

平成9年度に実施した高浜地区ふるさと農道整備事業に伴う発掘調査では、7世紀末から8世紀前半頃にかけての遺物を多く検出しているが、今回の調査では当該期の遺物は2点のみであり、中世土師器を中心であった。このことから、古墳時代終末期から奈良時代にかけての中心は遺跡の南側にあり、今回の調査地からさほど遠くない地域には中世期を中心とした集落跡が形成されていたものと予想される。

- 註 (1)「里方八石原遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書 第8集』 1998年  
(2)『高浜地区ふるさと農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1999年  
(3)『天神遺跡第9次発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1999年  
(4)『上長浜貝塚』出雲市教育委員会 1996年

### 出土遺物観察表(土器)

括団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
7-1	1Gr 褐色土	土師器 壺	-	4.6	-	外/ナデ 内/ナデ 底/系切り後、ナデ	淡褐色	密 1mm以上の白色 砂粒・石英・云母を多く含む	普通	底部難なつくり 底部と体部の境 が明瞭ではない
-2	4Gr オリーブ黒色 粘質土	土師器 壺	-	3.8	-	外/ナデ 内/ナデ 底/系切り後、ナデ	淡黄褐色	密 石英・云母を多 く含む	良好	底部と体部の境 が明瞭ではない
-3	1Gr 褐色土	土師器 壺	-	7.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転系切り	褐色	密 石英・雲母・金 雲母を含む	良好	
-4	試掘レシチ オリーブ黒色 粘質土	土師器 壺	-	4.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転系切り	淡黄褐色	密 石英を含む	普通	
-5	2Gr オリーブ黒色 粘質土	柱状高台付 壺	-	5.4	-	外/ナデ 底/ナデ	淡黄褐色	密 石英・云母を 含む	普通	粗雑なつくり 脚端部に1条の 凹線文入る
-6	側溝	須恵器 甕	-	-	-	外/カキメ 内/ハケ	外/灰色 内/浅灰色 断/浅灰色	密 1mm以下の白 色砂粒・石英 を含む	良好	
-7	2Gr P1	瓦質土器 鍋?	20.4	-	-	外/ナデ、部分的にケズリ 内/回転ナデ 底/ケズリの後、ナデ	外/黒色 内/黒色 断/淡褐色	やや粗い 石英・雲母を 含む	良好	口縁端部に1条 の凹線文入る
-8	1Gr オリーブ黒色 粘質土	白磁 碗	8.6	-	-	外/ナデ、錦運弁文が入る 内/ナデ	外/乳白色 内/乳白色 断/白色	密	良好	内外面に乳白色 の釉がかかる
-9	3Gr オリーブ黒色 粘質土	青磁 碗	-	-	-	外/ナデ、劍型の運弁文が 入る	外/緑灰色 内/緑灰色 断/灰色	密	良好	外面に緑灰色 の釉がかかる

### 出土遺物観察表(その他の遺物)

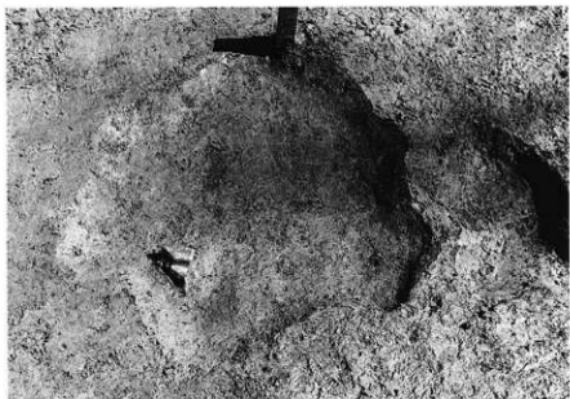
括団番号	出土地点	製品名	遺存状況	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
7-10	2Gr 褐色土	煙管	ほぼ完形	真鍮	7.1	1.6 (火皿)	0.1 (火皿)	3	折れ曲がっている
-11	3Gr 褐色土	ニホンジカ 大腿骨?	片端欠損	獸骨	6.4	2.4	0.75	10	

# 図版

図版 1



P1・P2検出状況



P1・P2完掘状況



P3検出状況

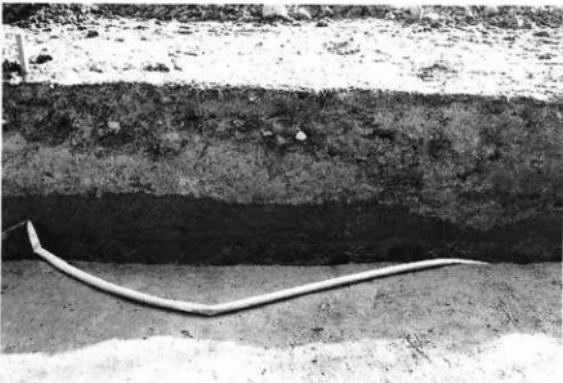
## 図版 2



SD01検出状況



動物遺存体出土状況

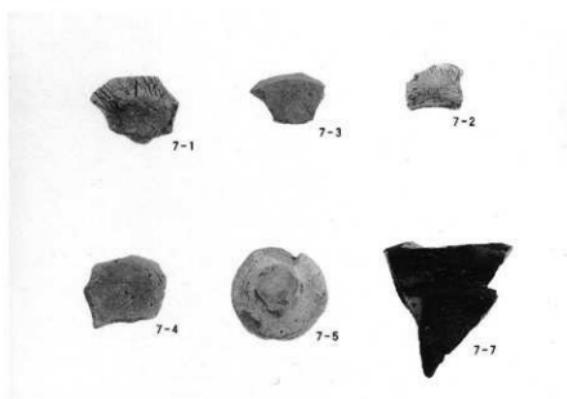


堆積土状況（中央）

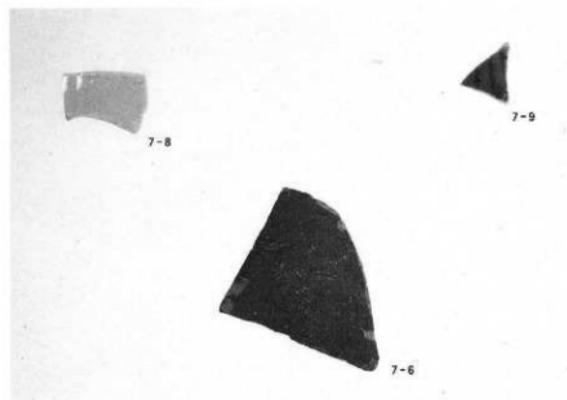
図版 3



完掘状況



出土遺物（土器）



出土遺物（土器）

図版 4



7-11



7-10

出土遺物（煙管・動物遺存体）

# 田中谷貝塚

## 1. 位置と環境

出雲市西神西町に所在する田中谷貝塚は、出雲市街地から約10km南西に位置している。中国山地から派生した丘陵地が出雲平野へと達する谷間に立地する貝塚で、北西約2kmには、面積1.4haを有す神西湖が存在している。この神西湖は、奈良時代に編纂された『出雲國風土記』によれば、周囲が18kmもあるような「神門水海」と呼ばれる潟湖であったことが記載されており、古代には現在よりもかなり広範囲な地域に及んでいたことが知られている。

この「神門水海」の周辺には、出雲市矢野遺跡、多聞院遺跡、上長浜貝塚があり、田中谷貝塚の南西に位置する湖陵町でも御領田遺跡や雲部I遺跡といった貝塚を伴う遺跡が多く確認されており、貴重な蛋白源として貝類が補採されていたことが窺える。また、上長浜貝塚にもみられるように、出雲地方では比較的早い時期まで貝塚が形成されており、地域的な特色となっている。

田中谷貝塚周辺の遺跡としては、西方には弥生土器や磨製石斧が出土している湖陵町中島遺跡、南西には縄文時代から中世に至るまでの複合集落遺跡として知られる湖陵町三部竹崎遺跡、さらに北方には5穴が確認されている出雲市正久寺横穴墓群などが存在しており、古くから「神門水海」の豊富な水産資源や海上交通を背景として生活が営まれてきたことが窺える。



第1図 調査地周辺の遺跡

## 2. 調査に至る経緯

平成7年(1995)2月、出雲農林振興センターから、西神西地区圃場整備事業予定地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地の一部には、周知の遺跡である田中谷貝塚が含まれていることから、出雲農林振興センターと協議し、緊急に発掘調査することで合意した。

事業概要としては、田中谷貝塚が所在している水田の一部に耕を敷き、排水を良好にするという簡易なものであったことから、幅約1m、長さ約3mのトレンチを設定して実施した(第2図)。調査は、平成7年(1995)3月1日から開始し、手堀りにより徐々に掘削しながら堆積層を確認し、遺物や貝類の取り上げ、一部断面の剥ぎ取りを実施して3月8日に終了した。

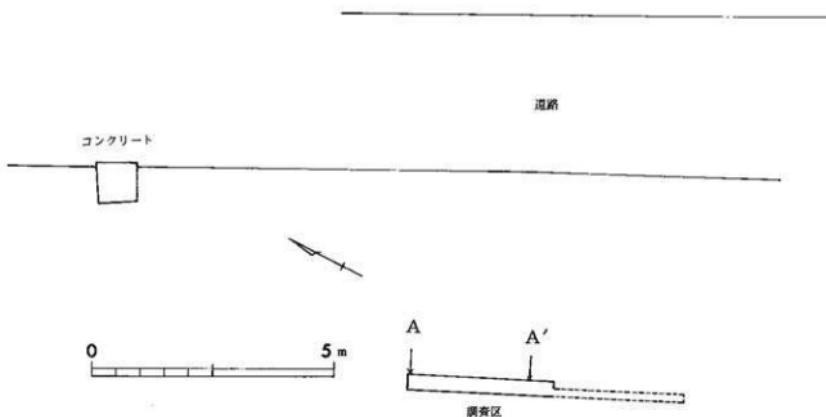
## 3. 調査の概要

### 堆積土状況(第3図)

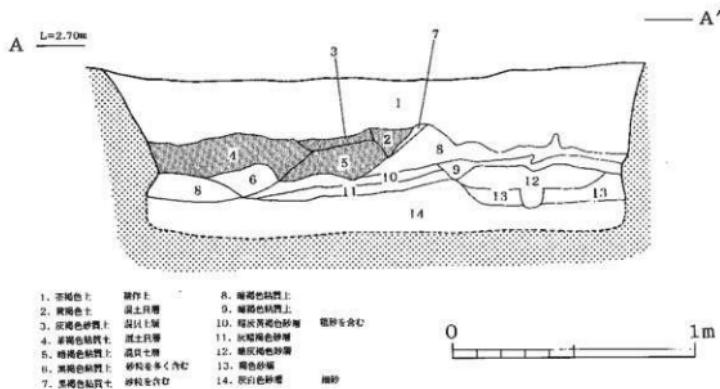
基本的な層序は、上層から約30cmは耕作土で、その下面に混土貝層(2・4層)、混貝土層(3・5層)と続き、黒褐色や暗褐色の粘質土が堆積し、さらに下面には褐色や灰白色の砂層が続いている。なお、調査は深さ約80cmまでとしていたため、その下位層については不明であり、掘削した最下層である14層内にも遺物を含むことなどから、遺跡としての地山はさらに深くなることが予想される。

これらの堆積層全てが遺物包含層となっているが、弥生土器を多く含むのは11層である。しかし、この下位層である14層中には古墳時代の遺物が多く出土していることから、一部、層位の逆転が認められる。調査区が狭小なため、詳しくはわからないが、11層は流れ込みの層であると考えられる。

貝塚は、2~5層によって形成されている。このうち4層は貝がほとんどを占め、純貝層に近い層



第2図 発掘調査区位置図



第3図 貝塚セクション図

である。また、貝塚は標高約2.30mから約20cmの層厚で、さらに北方へ向かって形成されていることが断面の堆積層の観察により、明らかである。

#### 遺物(第7図)

遺物には、弥生土器、土師器、須恵器などの土器のほか、貝層内から多くの動物遺存体や貝類、鉄製品などが出土している。このうち、弥生土器が最も多く出土しており、なかでも弥生時代終末期頃のものが多い。土師器・須恵器も若干出土しているが、小片が多く、形状が判断できるものは少ない。

第7図-1は、弥生土器壺の口縁部である。口縁端部は拡張し、3条の凹線文が施され、端部上方が外反している。このような特徴をもつ壺は、松本編年V-I~V-II様式に相当する資料と考えられ、弥生時代後期のものであろう。

2~4は、複合口縁をもつ弥生土器壺の口縁部である。いずれも口縁部は内外面ともナデによる調整が行われ、頸部下内面はケズリによる調整が行われるものである。このうち、3・5は、口縁端部をやや外方に折り曲げており、比較的新しい様相を示すものと考えられる。松本編年V-3様式~草田編年6期に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期頃のものであろう。なお、3・4については外面にスヌが付着している。

6~8は、土師器壺の口縁部である。6は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。7は、頸部から口縁部にかけてゆるく屈曲し、外面口縁部に一旦稜をなし<sup>(4)</sup>て口縁端部は外反し、先細りとなっている。8も7と同様な特徴を示している。6~8は、大東式に相当する資料と考えられ、古墳時代前期から中期頃にかけてのものであろう。なお、6・7は外面にスヌが付着している。

9は、弥生土器高壺の脚部である。脚部は末広がりになり、端部にフラットな面を作り出している。脚部外面はナデ、内面はケズリののち、ナデによる調整が行われている。この高壺のように脚端部に<sup>(5)</sup>フラットな面をもつものは珍しいが、市内では天神遺跡で同タイプのものが出土しており、弥生時代

後期頃の資料であろう。

10は、瓶の把手であろう。やや雑なナデによる調整が行われている。古墳時代後期のものであろう。

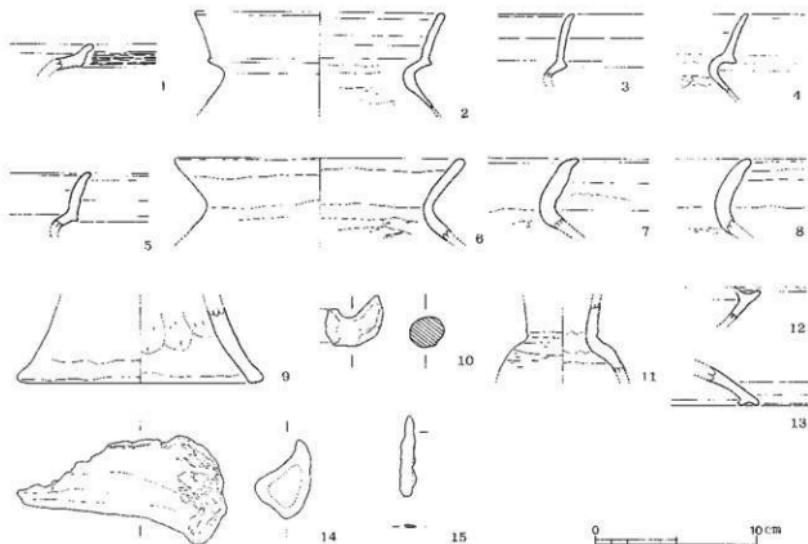
11は、須恵器の長頸瓶である。頸部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は内外面ナデ、頸部下外面はケズリ、内面はナデによる調整が行われている。古墳時代後期以降の資料であろう。

12は、須恵器坏身である。立ちあがりは短く内傾し、外面は回転ナデにより仕上げられている。

7世紀前半頃の資料であろう。13は、須恵器坏蓋で、口縁部内面に反りをもつものである。7世紀後半以降の資料であろう。

14は、動物遺存体である。最大長12.9cm、最大幅 6.4cm、最大厚 4.0cmを測ることから、かなり大型の獸骨であろうが、種別については不明である。なお、この他にも動物遺存体が魚骨も含め、貝層内から出土している。

以上のように、遺物としては弥生時代中期後葉から古墳時代終末期にかけての遺物が出土しており、中でも弥生時代終末期頃の遺物が最も多かった。しかし、サンプルで持ち帰って洗浄した貝層内からは、古墳時代後期以降の土師器や須恵器片がほとんどであったことから、貝塚が形成された時期については、当該期と考えるのが妥当であろう。また、貝層を形成する貝は、そのほとんどがヤマトシジミであり、カキが若干認められる程度である。この特徴は、出雲平野における貝塚を伴う遺跡と同様であり、「神門水海」で豊富に採れたヤマトシジミを中心に食用としていた様子が窺える。



第4図 出土遺物実測図

#### 4. まとめ

田中谷貝塚での調査は、調査範囲が狭小であるとともに、遺物のほとんどが拾い上げによるものであったため、詳細については十分な把握が困難であった。しかしながら、古墳時代後期頃に形成されたと考えられる貝塚を検出したことは大きな成果であった。また、出土遺物から推察するかぎり、この地域には一時断続する時期は認められるものの、弥生時代中期後葉から古墳時代後期頃まで生活が営まれていたことを窺い知ることができた。

「神門水海」周辺には貝塚が形成される遺跡が数多く存在しているが、出雲市上長浜貝塚や湖陵町御領田遺跡などは古代に貝塚が形成されている。田中谷貝塚では、古代の遺物が皆無であったことから、古代以降は生活の場としては利用されなかったようである。いずれにしても、「神門水海」周辺に存在する遺跡は、その豊富な水産資源に大きな影響を受けていたものと考えられ、各貝塚を形成している集落に時期差が生じていることは、集落の変遷を考えるうえでも重要である。

調査では、貝塚がさらに北方に広がりをもつことが確認されているが、今後調査する機会があれば、貝塚が形成されている範囲や、建物跡など実際に生活の場となった遺構の検出が望まれる。

- 註 (1)『上長浜貝塚』 出雲市教育委員会 1996年  
(2)『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』 正岡 勝夫・松本 岩雄編 木耳社 1992年  
(3)『南講武草田遺跡』 鹿島町教育委員会 1992年  
(4) 松山 智弘 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相一大東式の再検討ー」  
『島根考古学会誌 第8集』 島根考古学会 1991年  
(5)『天神遺跡第9次発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1999年

## 出土遺物観察表(土器)

拂団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
4-1	耕土	弥生土器 壺	16.0	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に3条の凹 縁文入る	褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁端部外反する
-2	表採	弥生土器 壺	15.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	橙褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁端部丸く おさめる
-3	表採	弥生土器 壺	9.3	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁端部外反する 外面口縁部にスス付着
-4	耕土	弥生土器 壺	15.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	外/橙褐色 内/褐色 断/褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・金 雲母を含む	やや不良	外面口縁部に スス付着
-5	11層	弥生土器 壺	12.8	-	-	口縁部内外面ナデ	灰褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・金 雲母を含む	良好	口縁端部外反する
-6	表採	土師器 壺	17.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英を含む	普通	外面口縁部に スス付着
-7	表採	土師器 壺	19.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母を含む	普通	外面口縁部に スス付着
-8	耕土	土師器 壺	22.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ナデ 内/ケズリ	褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母を含む	普通	
-9	耕土	弥生土器 高坏	-	13.6	-	外/ナデ 内/筒部ケズリ 脚部ナデ	褐色	やや粗い 1mm大の白色 砂粒・石英・雲 母を含む	良好	
-10	耕土	土師器 把手	-	-	-	ナデ	褐色	密 1mmの大の白色 砂粒・石英・雲 母を含む	普通	
-11	耕土	須恵器 長頭瓶	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外/ケズリ 内/ナデ	灰色	やや粗い 1mm大の白色 砂粒・石英を含む	やや不良	
-12	耕土	須恵器 坏身	-	-	-	内外面ナデ	灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含む	良好	
-13	耕土	須恵器 坏蓋	-	-	-	内外面ナデ	外/褐色 内/灰 断/淡灰色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含む	良好	外面に自然輪 がかかる

## 出土遺物観察表(その他の遺物)

拂団番号	出土地点	製品名	遺存状況	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
7-14	貝層内	不明	片端欠損	獸骨	12.9	6.4	4.0	70	
-15	貝層内	刀子	完形	鉄	5.1	0.8	0.2	3	錆付着

# 図版

図版 1



調査状況



貝層断面

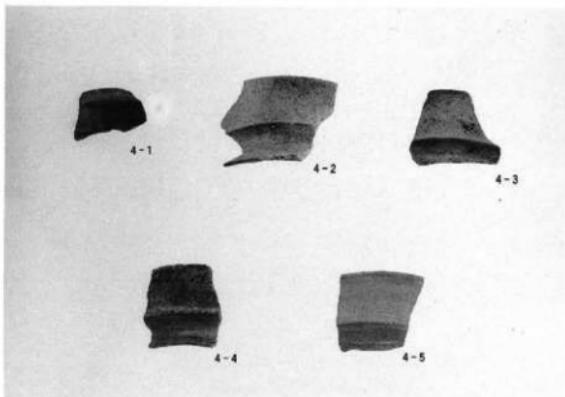


貝層断面

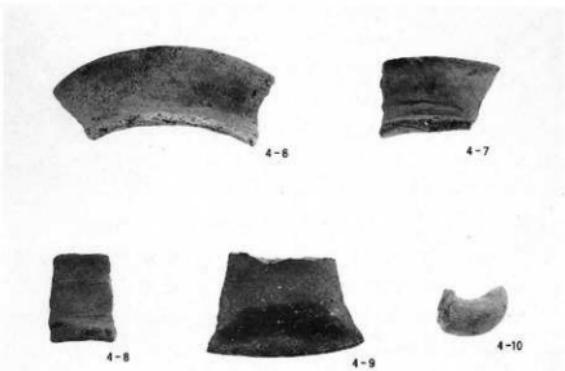
## 図版 2



完掘状況



出土遺物（土器）



出土遺物（土器）

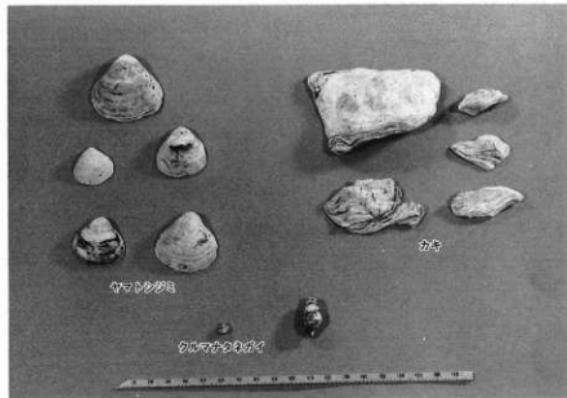
図版 3



出土遺物（土器）



出土遺物（動物遺存体・鉄器）



出土遺物（貝殻）

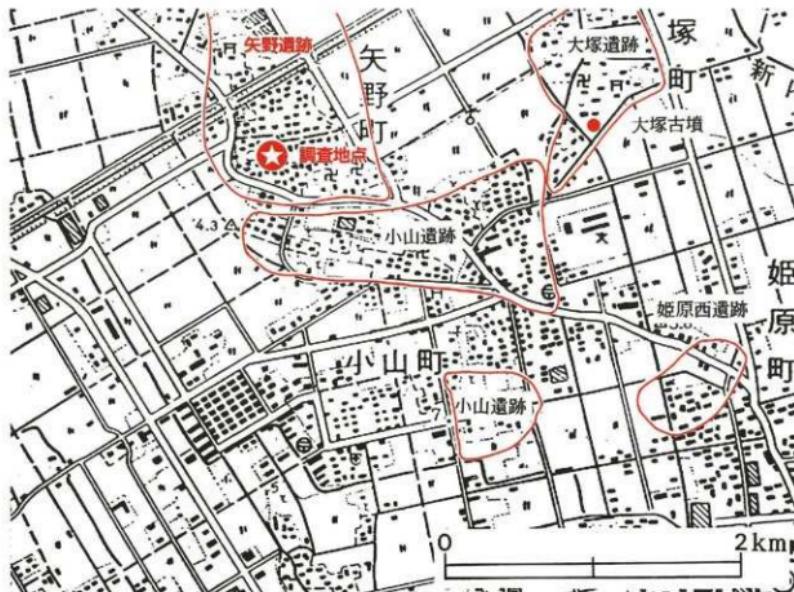
# 矢野遺跡

## 1. 位置と環境

矢野遺跡は、出雲市街地から約2km北方、四経地区に位置している。四経公民館から北西に伸びる微高地状の旧自然堤防上に立地する遺跡で、微高地は沖積低地である水田面から約1mほど高くなっている。現在はそのほとんどが宅地や畑地として利用されており、遺跡の範囲は東西300m、南北450mにも及び、広い範囲に縄文時代後期から近世に至るまでの遺物の散布が確認されている。

また、付近の小山遺跡、大塚遺跡をあわせ四経遺跡群と呼称されているが、そこでは矢野遺跡も第1地点から第6地点に区分されている。このうち、本調査は矢野遺跡の中心部である第1地点でのものである。

矢野遺跡第1地点は、1958年に山本清氏と旧島根県考古学会により発掘調査が行われており、貝層が確認されている。以後、矢野貝塚として知られるようになり、1959年には市の史跡に指定されている。また、1953、1971、1973年にもトレーナによる調査が行われ、黄色シルト層上面よりヤマトシジミを中心とする貝塚や土壙墓と思われる構造が検出されており、細身の管玉などが出土している。出土土器には弥生時代後期のものが量的に多く、弥生時代前期から古墳時代初頭のものまである。また、わずかながら縄文時代後期・晩期の土器が表探されていることが注意される。



第1図 調査地周辺の遺跡

矢野遺跡は、出雲における中心的な拠点集落として位置付けられており、なかでも弥生時代中期から古墳時代初頭にかけては飛躍的に集落が拡大している。出雲平野における集落遺跡には同様な傾向が認められるが、この時期に稻作を中心とする農耕社会の成立や、これらの人々を受け入れることのできる大きな社会変革があったと考えられる。また、貝塚の形成は、『出雲國風土記』に記されている「神門水海」が、出雲平野西部にまで広がっていたこととも密接に関連しており、この存在が人々の生活に大きな影響を及ぼしていたものと考えられる。

## 2. 調査に至る経緯

平成2年(1990)11月、出雲市矢野町の原 治男氏から庭地整備中に多量の遺物が出土しているので確認してほしいとの連絡が入った。至急現地に向かったところ、畑地において弥生時代後期を中心とする土器や、貝塚の存在が確認された。また、庭地においても一部が掘削され、弥生時代後期を中心とする土器が確認された。そのため、教育委員会としては、トレンチを設定して調査させてほしい旨を地権者である原 治男氏に相談したところ、調査を心よく受け入れて頂いた。なお、同氏には調査期間中にも、物心両面から援助を頂いている。

庭地の整備は、庭にある樹木を一旦南側の畑地に移し、砂を盛って整備したのち、再び樹木を庭地に移すものであったことから、2ヶ所のトレンチを設定して調査することとした(第2図)。

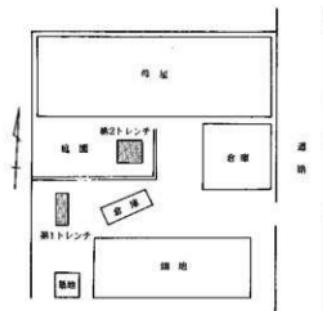
調査は、既に掘削中であった南側畑地の第1トレンチを平成2年(1990)11月6日から開始し、同年12月5日に調査を終了している。また、庭地に設定した第2トレンチは、平成3年(1991)3月初旬より調査を開始し、同年3月27日に調査を終了している。

## 3. 調査の概要

2ヶ所のトレンチを設定している。このうち南側の畑地に設定したトレンチを第1トレンチとし、庭地に設定したトレンチを第2トレンチとしている。

第1トレンチは、南北約3.3m、東西約1.4mの範囲に設定したトレンチで、遺物や貝層を確認した際にはかなりの部分が重機によって掘削されていた状態であった。また、第2トレンチでは南北約2.8m、東西約4mの範囲を調査しているが、第1トレンチ同様にかなり重機による搅乱を受けている。そのため、遺物は耕土中からの拾い上げによるものが大部分を占めており、掘削をまがれた部分については、遺構プランの検出に留意しながら1層ずつ掘り下げていった。そして、遺構の掘削や遺物の取り上げ、堆積土の状況を確認し、記録として残している。

以下、トレンチ別にその概要について記述する。



第2図 調査地概略図

### 第1トレンチ（第3図）

#### 堆積土状況

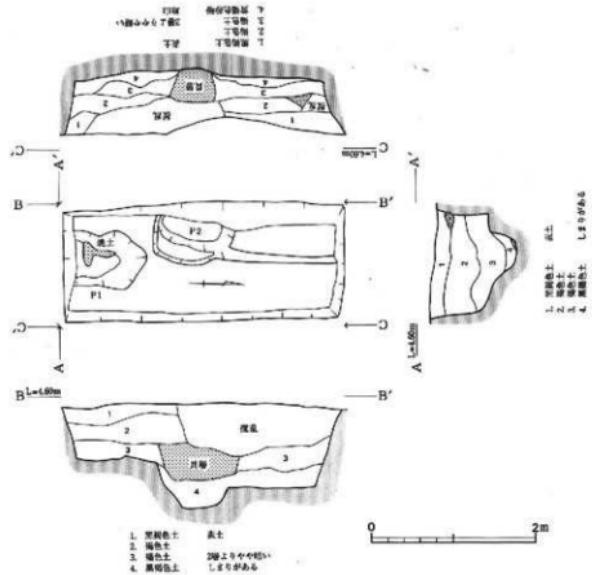
各壁ともに堆積土の状況は同様である。上層から黒褐色土（表土）、褐色土と続き、地山である黄褐色砂層に達する。畠地であるため、表土にも遺物を包含しているが、基本的には2・3層が遺物包含層となっており、層厚は40cm～60cmである。なお、北側は重機による攪乱を受けているため、上層を確認できなかった。

#### 遺構

遺構は地山上面においてピット状の遺構を2（P1・P2）検出している。

P1は、トレンチの南壁側で検出したもので、調査区外へとさらに広がりをもっているが、検出長は南北約86cm、東西約70cmを測り、深さは約14cmである。なお、検出高は、標高約3.80mである。覆土には固くしまりのある黒褐色土が堆積しており、底面の一部には焼土が認められていることから、何らかの理由により火が焚かれたものであろう。遺物が出土していないため、時期的判断は難しいが、貝塚が形成された時期よりも古く、弥生時代中期から後期の間に築かれた遺構である可能性が高い。

P2は、西壁に沿って確認されたピット状遺構で、西側は調査区外へと伸びているが、検出した状況から、径約1.0mを測る円形状を呈するものと考えられる。深さは約50cmを測り、覆土にはP1と同様に固くしまりのある黒褐色土が堆積している。遺物は出土していないが、貝塚が形成された時期よりも古い遺構であることが明らかである。



第3図 第1トレンチ遺構配置図

そのほか、3層上面と2層中において、貝層が確認されている。いずれもヤマトシジミを中心とする貝層であるが、3層上面における貝層は、東西方向に溝状の穴を穿って廃棄したものと考えられ、その溝幅は東側で約1.0m、西側では約60cm、深さは約40cmを測る。なお、検出高は標高約4.05mである。貝塚が形成された時期は、貝層内からの出土遺物が不明のため、時期的な判断は困難である。しかし、出土遺物から推察するかぎり、弥生時代後期から古墳時代初頭の間に形成された可能性が強いものと考えられる。

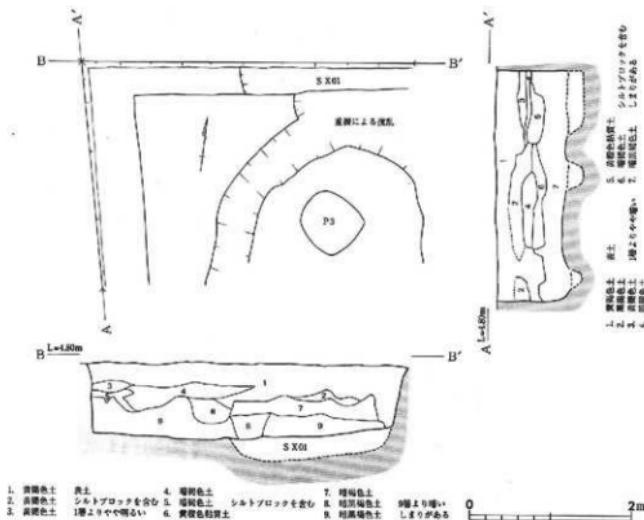
#### 遺物

遺物には弥生土器、土師器のほか、貝層内からはイノシシなどの動物遺存体や貝類が多量に出土している。最も多く出土しているのは弥生時代後期の土器であるが、中期の遺物も若干含まれている。統いて古式土師器が多く出土しているが、その後、古墳時代前期以降の土器、特に須恵器は1点も出土しておらず、その後、中世期の土器がわずかに認められる程度である。このことから、この地域では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて飛躍的に集落が拡大したが、古墳時代前期以降、急激に集落としては衰退し、生活の場とはなり得なかったようである。なお、出土遺物の詳細については後述する。

#### 第2トレンチ（第4図）

##### 堆積土状況

基本的な層序は、表土の下は暗褐色土、暗黒褐色土が堆積し、地山である黄褐色砂層に達する。このうち、暗褐色土、暗黒褐色土は遺物包含層となっており、層厚は50cm～70cmである。なお、第2ト



第4図 第2トレンチ遺構配置図

レンチでは重機による攪乱を受けている部分が大きく、西壁と北壁でのみ堆積土の状況が確認できた。また、第2トレントチは第1トレントチからは北東約8mのところに位置している。

#### 遺構

遺構は、トレントチのほぼ中央でピット状の遺構を1（P3）、北壁サブトレ内で落ち込み状遺構を1（SX01）検出している。

P3は、暗黒褐色土上面で検出し、径約80cmの円形状を呈しており、深さ約80cmを測る。なお、検出高は標高約4.35mである。覆土には、固くしまりのある黒褐色土が堆積している。遺物には、口縁部に凹線文を施す弥生土器の壺（第6図-16）と底部破片（第6図-9）が出土していることから、P3は弥生時代後期頃に築かれたものであろう。遺構の性格については不明である。

SX01は、北壁サブトレ内の地山である黄褐色砂層上面で検出しているが、詳細については不明である。しかし、P3よりも古い時期の遺構であることは明らかであり、出土遺物から推察するかぎり、弥生時代中期中葉から後期にかけてのものである可能性が強い。

#### 遺物

遺物には、弥生土器・土師器・須恵器などが出土している。このうち、須恵器は平安期の長頸瓶1点のみの出土である。第1トレントチと同様に古墳時代前期以降、奈良時代までの遺物が1点も認められていないことが注意される。なお、出土遺物の詳細については後述する。

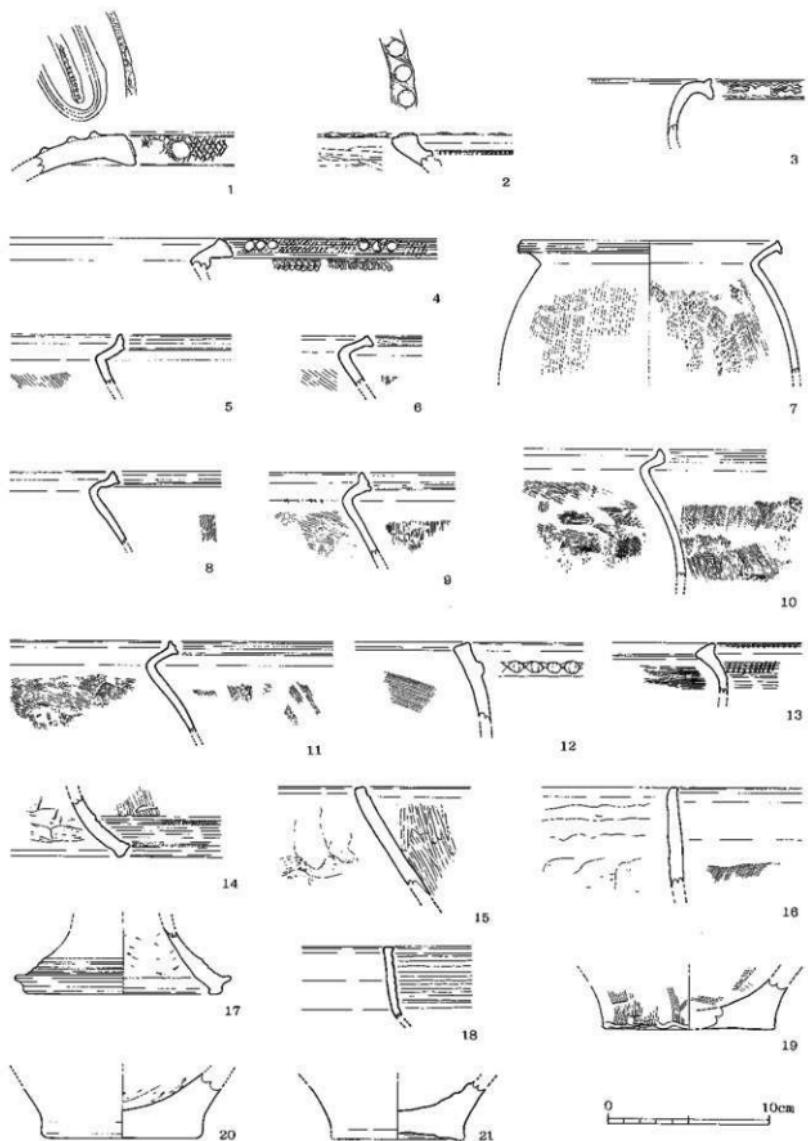
#### 出土遺物について

2ヶ所のトレントチを設定して調査を行っているが、実際には重機によって掘削された排土中からの出土遺物が多いため、出土した層位については不明であるものが多い。また、第1トレントチ付近の畠地で表採したものもあり、これらを一括して記述することとする。

第5図-1～3は、弥生土器の壺である。1は、口縁部が朝顔状に大きく開き、口縁端部は下垂している。口縁拡張部にはヘラ状工具によって交互に斜線文を巡らし、円形浮文を貼付けている。また、口縁内面には楕円形に三角形文帯を貼り巡らせ、その中にも刻目文を施した三角形文帯を貼付けている。2は、無頸壺である。口縁端部を厚くして上面にフラットな面を作り、その間に3本単位のクシ状工具からなる斜線文を施している。また、体部はかなり張出すようである。外面口縁部の下には刻目文を施した三角形文帯が貼付けられ、内面はミガキによる調整が行われている。3は、口縁部が大きく朝顔状に開き、口縁端部は上下に拡張している。口縁端部には波状文が施されている。これらの壺は、松本編年III-1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉頃のものであろう。

4～11は、弥生土器の壺である。4は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は上下に拡張している。口縁拡張部には3条の凹線文が施され、その上からヘラ状工具による斜線文、さらには円形浮文を貼付けている。また、頸部には指頭圧痕文帯が貼り付けられている。このような特徴をもつ壺は、松本編年IV-1様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉頃のものであろう。

5～11は、いずれも頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁拡張部には2条の凹線文を施す壺である。形態的には、口縁端部が上下に拡張するもの（6・7・8・11）、上方に大きく拡張



第5図 出土遺物実測図(1)

するもの（5・9・10）などがあり、5・10は頸部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がるのが特徴である。頸部下の調整は、外面は縦方向のハケ、内面上部は横、斜め方向のハケによって調整されるものが多いが、8は外面頸部下は縦方向のミガキによって調整されており、やや古い様相を示すものである。これらの壺は、松本編年IV-1様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉頃のものであろう。

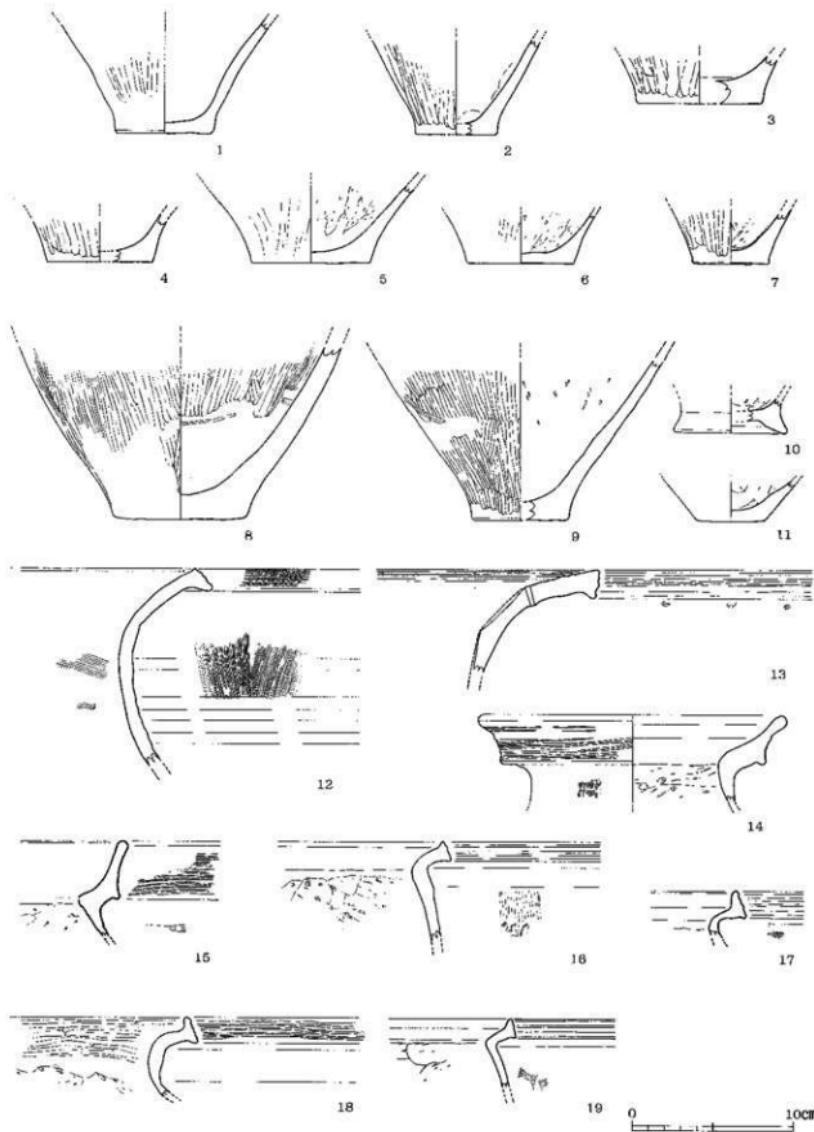
12・13・15・16は、弥生土器の鉢、あるいは無頸壺と称されるものであろう。12は、口縁端部を厚くして、上面にフラットな面を作り出している。外面口縁部の下には1条の指頭圧痕文帯が貼付けられ、その下方はナデ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。13は、口縁端部が内外に拡張し、上面にフラットな面を作り出し、口縁端部の外面には刺突による刻目文を施している。さらに、口縁部下外面には2条の凹線文とヘラ状工具による刻目文が施されている。15は、口縁部下外面は縦方向のミガキ、内面上位は指押さえ、下位はケズリによる調整が行われており、体部はかなり張出すようである。16は、外面上位はナデ、下位は縦方向のハケ、内面上位はナデ、下位はケズリによる調整が行われている。以上のような鉢あるいは無頸壺は、12がやや古い様相を示すものの、おおよそ松本編年IV-1～2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけてのものであろう。

14・17は、弥生土器高坏の脚部である。14は、脚端部がやや肥厚し、外面には刻目文を施している。その上位には6条の凹線文が施され、一部には刻目文が刻まれている。さらに、裾部から筒部外面にかけてはミガキ、内面はケズリによる調整が行われている。17は、脚端部が拡張して肥厚し、拡張部に1条の凹線文、外面裾部には4条の凹線文を施している。外面上位はミガキ、内面はケズリによる調整が行われている。これらの高坏は、松本編年IV-2～V-1様式に相当する資料と考えられ、弥生時代後期前葉から中葉にかけてのものであろう。

18は、弥生土器壺の口縁部であろうか。外面には7条以上の凹線文が施され、内外面ともナデによる調整が行われている。弥生時代後期前葉頃のものであろう。

第5図-19～21、第6図-1～11は、弥生土器の壺あるいは壺の底部である。一般的には外面は縦方向のミガキによる調整が行われるが、内面はケズリによる調整が行われるもの（第5図-20、第6図-5～7、9～11）、指押さえによる調整が行われるもの（第6図-1～4）に分類できるが、底部付近の破片からは、時期的判断は難しい。しかし、第5図-19のように外面が縦方向のハケ、内面もハケによる調整が行われているものや、第6図-8のように内面胴部がミガキによる調整が行われているものは、やや古い様相を示し、弥生時代中期中葉頃のものであろう。また、第6図-10のように高台を有するものや、11のように底径が小さくなるものは、松本編年V様式の特徴をもつもので、弥生時代後期のものであろう。

第6図-12・13は、弥生土器の壺である。12は、わずかに外傾して伸びる長めの口頸部をもち、口縁端部は下垂して、3条の凹線文とヘラ状工具による刻目文を施している。外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。また、外面頸部には6条以上の凹線文が施されている。13も形態的には12と同様であるが、口縁拡張部には3条の凹線文、口縁部内面には5条の凹線文が施され、その下位に3以上の穿孔が認められる。以上のような特徴をもつ壺は、松本編年IV-1～



第6図 出土遺物実測図(2)

2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代中期後葉から前期前葉にかけてのものであろう。

第16図-14~19、第7図-1・2は、弥生土器壺である。14は複合口縁をもち、頸部から口縁端部にかけて外傾して立ち上がる。口縁部外面には7条の凹線文が施され、頸部下外面はハケ、内面はケズリによる調整が行われている。15は、頸部から口縁部にかけて直立ぎみに立ち上がる。口縁部外面には11条の擬凹線文が施され、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。16は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部はわずかに上下に拡張し、口縁拡張部には3条の凹線文が施されている。頸部下外面は縱方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。17は、頸部から口縁部にかけて強く外方へ屈曲し、口縁端部は上方に拡張して3条の凹線文が施されている。18は、頸部から口縁部にかけて外方へゆるく屈曲し、口縁端部は上下に拡張して、擬凹線文を施している。外面はナデ、内面口縁部は横方向のミガキ、頸部下はケズリによる調整が行われている。19は、16と同様な特徴をもつ。第7図-1は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁端部は上下に拡張して3条の凹線文を施している。頸部下外面は縱方向のハケ、内面はナデと斜め方向のハケによる調整が行われている。2は、頸部から口縁部にかけて強く外方に屈曲し、口縁端部は上下に拡張して4条の凹線文を施し、頸部下内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。以上のような特徴をもつ壺は、14・15が松本編年V-3様式に相当し、弥生時代後期後葉のものと考えられるが、その他はおおよそ弥生時代中期後葉から前期前葉にかけてのものであろう。

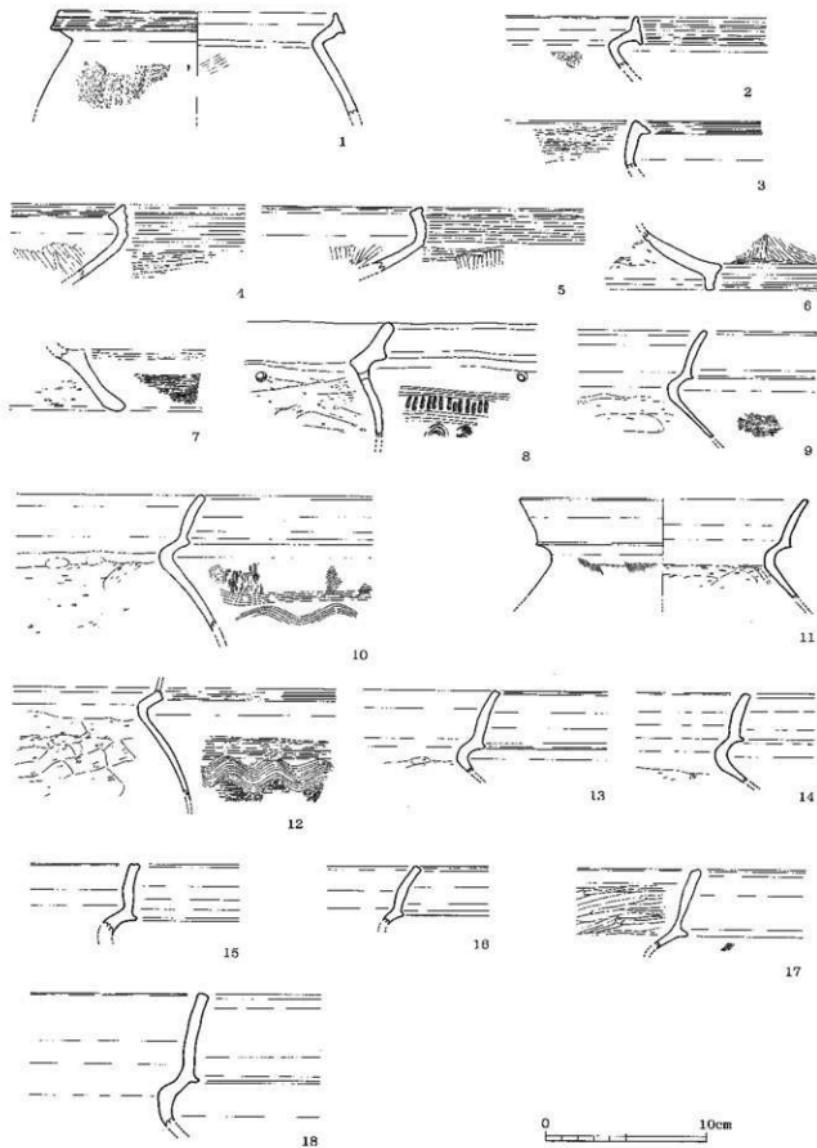
第7図-3は弥生土器の壺であろうか。口縁端部は外方に突出して上面にフラットな面を作り出し、3条の凹線文を施している。内面は横方向のミガキによる調整が行われている。

4・5は、弥生土器高杯の坏部である。内外面ともミガキによる調整が行われ、口縁端部と外面には凹線文が施されている。6は脚部であり、脚端部には4条の凹線文が施され、裾部外面はミガキ、内面はケズリによる調整が行われている。以上のような高杯は、松本編年IV-2様式に相当する資料と考えられ、弥生時代後期前葉のものであろう。

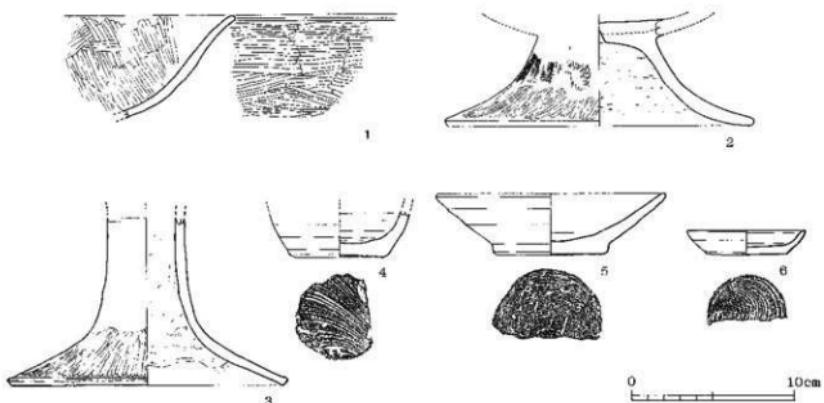
7は、鼓形器台の脚台部である。外面には13条の擬凹線文を施し、内面はケズリによる調整が行われている。松本編年V-2様式に相当する資料である。

8~18は、複合口縁を有する壺である。8は、口縁端部の器壁がやや厚く、端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともナデ、頸部下外面には4条の凹線文で区画された中に貝殻腹縁による刻目文、さらに下方には波状文と思われる文様が施され、内面はケズリによる調整が行われている。また、肩部には穿孔が認められている。9~12は、口縁端部を丸くおさめるもので、口縁部は内外面ともナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われるものである。10・11は、外面頸部下には平行線文や波頂間の広い波状文が施されている。13~18は、口縁端部が平坦につくられるものである。17は、口縁端部が平坦につくられているが、やや内傾し、内面は横方向のミガキによる調整が行われているのが特徴である。これらの壺は、8がやや古く、松本編年V-2様式に相当するものと考えられ、弥生時代後期後葉のものであろう。9~12は、口縁端部の特徴から草田6期、13~18は草田7期に相当する資料と考えられ、それぞれ弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。<sup>(2)</sup>

第8図-1は鼓形器台の受部である。外面は横方向のミガキ、内面は縱方向のミガキによる丁寧な調整が行われている。このように、内外面ともミガキによる調整が行われるタイプのものは珍しい。



第7図 出土遺物実測図(3)



第8図 出土遺物実測図(4)

弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。

2は、高坏の脚部から筒部にかけての破片である。脚部は末広がりになり、脚端部は丸くおさめている。外面脚部はミガキ、裾部は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。なお、脚部と坏部は円盤充填法によりつながれている。3も形態的にはほぼ同様であるが、2と比べると器高が高いものである。いずれもその特徴から、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものであろう。

4は、須恵器の壺である。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、底部には回転糸切り痕が認められる。器形から判断すれば、平安期のものと考えられる。

5は、土師器坏である。底部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がっている。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。6は小皿である。成形は5と同様であるが、この器形は11世紀後半以降に出現するものである。

#### 4.まとめ

第1トレンチでは、これまでの調査によって知られていた貝塚の存在が確認され、矢野第1地点での貝塚が、かなり広い範囲に点在していることを窺い知ることができた。この背景には「神門水海」で捕採される豊富な水産資源があることはもちろんあるが、当該地が稻作を中心とした農耕社会に適した環境であり、海上交通の要衝を占めていたことも一つの要因であろう。

出土遺物をみると、弥生時代中期中葉から古墳時代前期初頭にかけて多量の遺物が出土していることから、この時期に集落が飛躍的に拡大していったことは明らかである。しかし、その後、奈良時代に至るまでの遺物が1点も確認されていないことは、当該地における集落が突然衰退したことを物語つ

ている。その要因は明らかではないが、何らかの大きな社会変革があったものと考えられる。

本調査では、範囲が極めて限定されていたこともあり、遺構の性格を十分に把握することができなかった。しかし、調査地周辺には大規模な居住域や墓域が存在していたことが予想され、今後調査する機会があれば、遺跡の実態を明らかにし、郷土の財産として後世に伝えていくことが望まれる。

なお、本文は、他の職員が調査した図面やその出土遺物をもとに、岸がまとめたものである。したがって、遺物の出土層位や遺構の時期についての的確な判断ができなかったことを断つておく。

註 (1)『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』 正岡 勝夫・松本 岩雄編 木耳社 1992年

(2)『南講武草田遺跡』 鹿島町教育委員会 1992年

### 出土遺物観察表

博団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
5-1	第1レンチ 排土	弥生土器 壺	-	-	-	内外面ナデ 口縁端部に円形浮文・ 斜格子文	淡褐色	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁部内面に三 角形文帯を貼付 け刻目文
-2	第2レンチ サブトレ 黒色土	弥生土器 無類壺	-	-	-	外/ナデ 内/ミガキ 口縁端部に円形浮文・斜羅文	褐色	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母を含む	良好	外面に三角形 文帯を貼付け 刻目文
-3	第2レンチ サブトレ 黒色土	弥生土器 壺	11.2	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に波状文	淡褐色	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-4	第2レンチ サブトレ 黒色土	弥生土器 壺	19.2	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁端部に円形浮文・ 貝殻裏縁による刻目文	褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部に3条の 凹線文 外面頭部に指頭圧 痕文帯貼付け
-5	第1レンチ 排土	弥生土器 壺	16.5	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/ナデ 内/斜め方向ハケ	外/淡褐色 内/褐色 断/淡褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部上方に 拡張する
-6	第1レンチ 排土	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縱方向ハケ 内/縱方向ハケ	淡褐色	普通 石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部に2条の 凹線文
-7	第1レンチ 排土	弥生土器 壺	15.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縱方向ハケ 内/縱方向ハケ	淡褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部に2条の 凹線文 外面にスス付着
-8	第2レンチ サブトレ 黒色土	弥生土器 壺	14.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/ミガキ 内/ナデ	外/褐色 内/淡褐色 断/淡褐色	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部に2条の 凹線文
-9	第2レンチ サブトレ	弥生土器 壺	17.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縱方向ハケ 内/斜め方向ハケ	外/褐色 内/淡褐色 断/淡褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英を含む	良好	口縁端部に2条の 凹線文 内面頭部にヘラ状 工具痕あり
-10	第1レンチ 搅乱土	弥生土器 壺	14.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縱方向ハケ 内/ナ・ト割けハケ	褐色	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部に2条の 凹線文 外面スス付着

検出番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
5-11	第1レンチ 排土	弥生土器 壺	13.8	-	-	口縁部内外面ナデ 裏部下 外／縱方向ハケ 内／斜め方向ハケ	淡黄褐色	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒・石英・金雲母を含む	良好	口縁端部に2条 の凹線文
-12	第1レンチ 排土	弥生土器 鉢or無縁壺	-	-	-	外／指頭圧痕文帯貼付、 下方はナデ 内／斜め方向ハケ	橙褐色	普通 1mmの大の白色 砂粒・石英を含む	普通	
-13	第1レンチ 排土	弥生土器 鉢or無縁壺	-	-	-	外／端部・脇部に刻目文 2条以上の凹線文 内／横方向ハケ	褐色	密 1mmの大の白色 砂粒・石英を含む	良好	
-14	第2レンチ サブトレ 黒色土	弥生土器 高壺	-	11.6	-	外／脚部に6条の凹線 文、上方はミガキ 内／ケズリ	褐色	密 1mmの大の白色 砂粒・石英・金雲母を含む	良好	脚端部・脚部に 刻目文
-15	第1レンチ 表採	弥生土器 鉢or無縁壺	-	-	-	外／ミガキ 内／ケズリ	橙褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	
-16	第1レンチ 排土	弥生土器 鉢or無縁壺	14.4	-	-	上方は内外面ナデ 脇部 外／縱方向ハケ 内／ケズリ	外／橙褐色 内／淡褐色 外／淡褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	
-17	第1レンチ 排土	弥生土器 高壺	-	11.8	-	外／脚部に3条の凹線 文、上方はミガキ? 内／ケズリ	褐色	普通 1mmの大の白色 砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-18	第1レンチ 表採	弥生土器 壺?	8.0	-	-	外／7条の凹線文 内／ナデ	外／淡褐色 内／黑色 断／黑色	密 1mmの大の白色 砂粒・石英を含む	良好	
-19	第1レンチ 排土	弥生土器 壺or壺	-	10.2	-	外／縱方向ハケ 内／ハケ	淡黄褐色	やや粗い 1mmの大の白色 砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-20	第1レンチ 排土	弥生土器 壺or壺	-	9.6	-	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	普通 1mmの大の白色 砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-21	第1レンチ 排土	弥生土器 壺or壺	-	8.0	-	外／ナデ 内／剥離により不明	外／淡赤褐色 内／不明 断／褐色	密 1mmの大の白色 砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
6-1	第1レンチ 排土	弥生土器 壺or壺	-	5.8	-	外／縱方向ミガキ 内／ナデ	赤褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	
-2	第1レンチ 排土	弥生土器 壺or壺	-	4.9	-	外／縱方向ミガキ 内／ナデ、底部付近に 指頭圧痕残る	黑褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母を含む	やや不良	
-3	第2レンチ サブトレ 黒色土	弥生土器 壺or壺	-	7.6	-	外／縱方向ミガキ 内／ナデ	外／淡褐色 内／黒灰色 断／淡褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-4	第2レンチ サブトレ 黒色土	弥生土器 壺or壺	-	6.5	-	外／縱方向ミガキ 内／ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	

拂図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
6-5	第1レンチ 排土	弥生土器 壺or甕	-	7.2	-	外／縱方向ミガキ 内／ケズリ	褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	
-6	第1レンチ 表採	弥生土器 壺or甕	-	6.6	-	外／縱方向ミガキ 内／ケズリ	褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
-7	第1レンチ 表採	弥生土器 壺or甕	-	4.5	-	外／縱方向ミガキ 内／ケズリ	淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
-8	第1レンチ 排土	弥生土器 壺or甕	-	7.8	-	外／縱方向ミガキ 内／底部付近ナデ 側部ミガキ	橙褐色	やや粗い 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	
-9	第2レンチ P3	弥生土器 壺or甕	-	5.6	-	外／縱方向ミガキ 内／ケズリ	淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	普通	
-10	第1レンチ 排土	弥生土器 壺or甕	-	6.8	-	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	底部に高台がつく
-11	第1レンチ 排土	弥生土器 壺or甕	-	4.0	-	外／ナデ 内／ケズリ	外／淡褐色 内／褐色 新／淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	
-12	第1レンチ 排土	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部外面ナデ 頭部 外／6条以上の凹線文 縱方向ハケ 内／剥離により不明	黃褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	普通	口縁端部に3条の凹線文・刻目文
-13	第1レンチ 排土	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部外面ナデ 頭部 外／縱方向ハケ 内／剥離により不明	黃褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	口縁端部に3条の凹線文 頭部に3以上の穿孔あり 口縁内面に5条の凹線文
-14	表採	弥生土器 壺	18.4	-	-	口縁部外面ナデ 頭部下 外／縱方向ハケ 内／ケズリ	橙褐色	密 石英・雲母を含む	良好	外面口縁部に7条の凹線文
-15	第2レンチ 耕作土	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部外面ナデ 頭部下 外／2条以上の 凹線文 内／ケズリ	外／褐色 内／淡褐色 新／淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	やや不良	外面口縁部に11条の擬凹線文
-16	第2レンチ P3	弥生土器 壺	16.4	-	-	口縁部外面ナデ 頭部下 外／縱方向ハケ 内／ケズリ	外／淡褐色 内／褐色 新／褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	口縁端部に3条の 凹線文、外面胴部 に波状文・刻目文 外面スズ付着
-17	第2レンチ 黒色土	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部外面ナデ 頭部下 外／縱方向ハケ 内／不明	淡赤褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	口縁端部に3条の 凹線文
-18	第2レンチ 耕作土	弥生土器 甕	20.0	-	-	外／ナデ 内／口縁部から腹部にかけて横方向ミガキ 頭部下はケズリ	橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	口縁端部に4条の 擬凹線文
-19	第1レンチ 排土	弥生土器 甕	17.2	-	-	口縁部外面ナデ 頭部下 外／縱方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母を含む	良好	口縁端部に3条の 凹線文

擲回番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
7-1	第1トレチ 排土	弥生土器 甕	17.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縱方向ハケ 内/斜め方向ハケ	外/淡褐色 内/橙褐色 断/淡褐色	普通 1mm以上の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部に3条 の凹線文
-2	第2トレチ 擾乱土	弥生土器 甕	21.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/不明 内/斜め方向ハケ	褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部に4条 の凹線文
-3	第1トレチ 排土	弥生土器 甕	12.2	-	-	外/ナデ 内/ミガキ	褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部に3条 の凹線文
-4	第1トレチ 排土	弥生土器 高坏	21.0	-	-	口縁部内外面ミガキ 口縁端部に3条の凹線文 外面に5条の凹線文	淡褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	
-5	第1トレチ 排土	弥生土器 高坏	19.8	-	-	口縁部内外面ミガキ 口縁端部に2条の凹線文 外面に5条の凹線文	外/褐色 内/橙褐色 断/淡褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	外面口縁部に スス付着
-6	第2トレチ サブトレ 黒色土	弥生土器 高坏	-	16.0	-	外/ミガキ 内/ケズリ	褐色	やや粗い 1mm以上の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	普通	脚部端部に4条の 凹線文
-7	第2トレチ	弥生土器 敷形器台	-	-	-	外/ナデ 内/ケズリ	外/淡褐色 内/褐色 断/褐色	やや粗い 1mm以上の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	不良	脚部に13条の擬 凹線文
-8	第1トレチ 排土	弥生土器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/4条の平行線文・ 刻文・波状文 内/ケズリ	橙褐色	やや粗い 1mm以上の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	不良	頭部下に穿孔あり
-9	第1トレチ 排土	弥生土器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/横・斜め方向ハケ 内/ケズリ	褐色	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	外面スス付着 口縁端部丸くおさめる
-10	第1トレチ 擾乱土	弥生土器 甕	18.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縱方向ハケ、 波状文 内/ケズリ	褐色	普通 1mm以上の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部丸くおさめる
-11	第1トレチ 排土	弥生土器 甕	17.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/縱方向ハケ 内/ケズリ	褐色	普通 1mm以上の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部丸くおさめる
-12	第1トレチ 排土	弥生土器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/平行線文・波 状文・ハケ 内/ケズリ	淡褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	外面胴部にスス 付着
-13	第2トレチ 擾乱土	古式土器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/ナデ 内/ケズリ	淡褐色	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	普通	口縁端部平坦に つくる
-14	第1トレチ 排土	古式土器 甕	13.5	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/ナデ 内/ケズリ	橙褐色	普通 1mm以上の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	普通	口縁端部平坦に つくる
-15	第1トレチ 排土	古式土器 甕	16.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外/ナデ 内/ケズリ	淡褐色	普通 1mm以上の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部平坦に つくる

博団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
7-16	第2レンチ 排土	古式土師器 甕	14.8	-	-	口縁部内外面ナデ	淡赤褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母 を含む	やや不良	口縁端部平坦につくる 外面口縁部にスス付着
-17	第1レンチ 排土	古式土師器 甕	25.2	-	-	口縁部 外/ナデ、一部ハケ 内/横方向ミガキ	外/淡黄褐色 内/橙褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部内傾し、 平坦につくる
-18	第1レンチ 排土	古式土師器 甕	27.4	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁端部平坦につくる
8-1	第1レンチ 排土	古式土師器 鼓形器台	28.0	-	-	外/横方向ミガキ 内/縱方向ミガキ	淡黄褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	受部破片
-2	表探	古式土師器 高坏	-	18.4	-	外/裾部縱方向ミガキ、 筒部ハケ 内/裾部ハケ、筒部ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母 を含む	良好	円盤充填法
-3	第1レンチ 排土	古式土師器 高坏	-	16.7	-	外/裾部縱方向ミガキ、 筒部縱方向ハケ 内/裾部ハケ、筒部ケズリ	淡黄褐色	普通 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母 を含む	良好	
-4	表探	須恵器 壺	-	5.1	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	にぶい黄褐色	密 1mm以下の 白色砂粒・ 石英を含む	不良	
-5	第1レンチ 排土	土師器 坏	13.8	6.6	3.8	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 石英を含む	良好	内外面にスス付着
-6	第2レンチ 撹乱土	土師器 小皿	7.2	5.0	1.5	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 1mm以下の白色 砂粒・石英・雲母・ 金雲母を含む	良好	口縁部にスス付着

# 図版

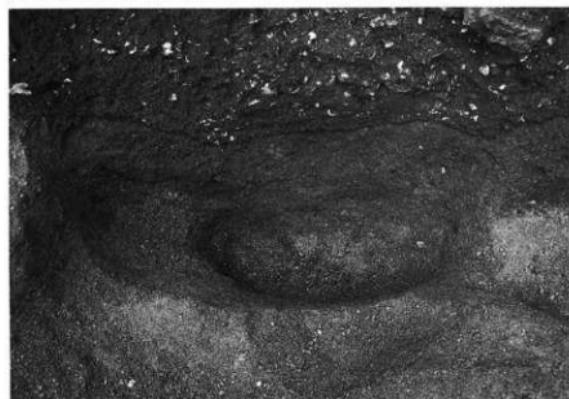
図版 1



第1トレンチ  
貝層検出状況



第1トレンチ  
貝層断面（東壁）



P 2 完掘状況

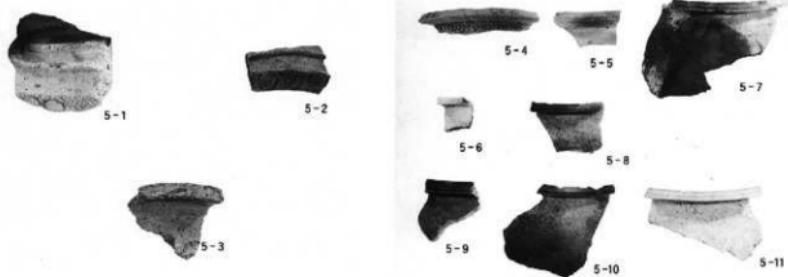
## 図版 2



第2トレンチ  
P3検出状況



第2トレンチ  
堆積土状況（西壁）



矢野遺跡出土遺物

図版 3

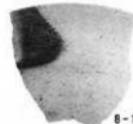


矢野遺跡出土遺物

## 図版 4



7-18



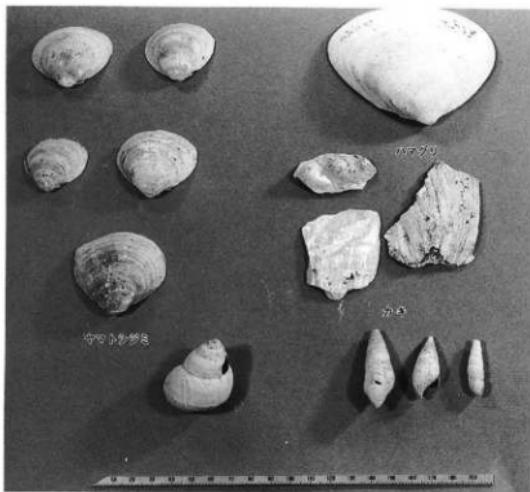
8-1



イノシシ下顎骨



イノシシ肩甲骨



矢野遺跡出土遺物

平成12年(2000)3月19日 印刷  
平成12年(2000)3月30日 発行

**出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書**  
**第 10 集**

発行 出雲市教育委員会  
印刷 オリジナル